

「流星の軌跡」の軌跡 — 座光寺公明さんのこと —

今野 博昭

座光寺さんが逝ってから今年で6年になります。彼との交流は84年10月から亡くなる87年1月までの、わずか2年3か月という短いものでしたが、私にとってはかけがえのない期間だったといえます。

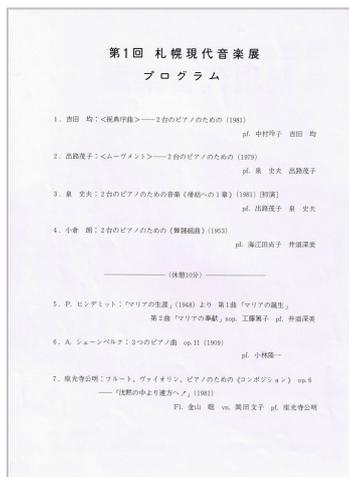
以下は、私の目を通して見た座光寺さんについてのドキュメントです。

座光寺公明さんとはじめて出会ったのは、82年1月13日(水)、第1回札幌現代音楽展の公開講座(札幌市、ピアノハウス)においてである。木村雅信先生の「最新ポリフォニー理論」の講義を黙って目をつぶって(というより、俺は聞く必要がない、あるいは相当疲れているのでねむたい、という態度で)聴いているのが彼だった。講義が終わって、ショールームのピアノを前に仲間と、石井眞木のブラックインテンションがどうのこうのと何やら雑談していたが、私には興味のないことだった。

翌日の作品発表会(札幌市教育文化会館小ホール)で、昨日の彼が「座光寺公明」という名前の作曲家であることを知った。その作品は「コンポジション『沈黙の中より遠方へ！』Op.6」という題名で、作曲者はプログラムで曲について次のように述べていた。

人間社会の内には、「個」の存在が非常に重要です。それは、ある時他に従い、又、ある時は他を率い、又、あらゆるものから独立したり、又、すべてに協調もし等々。これらは、音楽におけるアンサンブルの世界とまったく同じです。これらを音の中で表出せんと思って書かれた曲です。

しかし、私は、たとえそのような人間社会の力学関係を音楽で表すことに成功したところで、それが聞き手にとって面白いだろうか、といった素朴な疑問を持っただけだった。(演奏、Fl. 金山聡、Vn. 岡田文子、Pf. 座光寺公明)



第1回札幌現代音楽展 プログラムから、1982年1月14日(木)、札幌市教育文化会館小ホール

82年6月22日(火)。邦楽器のための作品コンサート、札幌市教育文化会館小ホール。コンポジションII「瞑」Op.11を聴く。尺八、菅原久仁義。人を寄せ付けない厳しいたたずまいをみせる。

82年8月13日(金)。第2回札幌現代音楽展、札幌市教育文化会館小ホール。無伴奏チェロのための「変奏曲」Op.16。Vc.毛利巨塵。ほとんど記憶がない。

【第1回】札幌現代音楽展

プログラム

第1部

1. D. ミヨー 「アダジールの思い出」(1930-21) No.1, 11, 2, 4, 7
pf 重友美奈子
2. T. ツェネカール ソナタ「Teenagers」(1963) pf 二橋忠志
3. 橋本 亮 ヌメロシムルシ (1992) cello 毛利 巨塵
4. 出原夜子 ビゴターセロ (1982) cello 毛利 巨塵
pf 高橋 実子

第2部

5. 小林隆一 「真目の秋より」I, IV (中原中恵) (1982) pf 小林隆一
voc 堀江輝雄 pf 小林隆一
6. L. ベリオ セクステンツァ (1966) pf 小林 隆一
7. 梶 英夫 無伴奏チェロのための一章 (1982) cello 毛利 巨塵
8. 座光寺公明 変奏曲 op. 16 (1982) cello 毛利 巨塵

第3部

9. 木村雅信 魔神の語り op. 123 (1982) pf 木村 雅信
10. 木村雅信 ELEGIA op. 118 (1982) cello 毛利 巨塵
11. L. プローウェル 永遠の電燈 (1971) guitar 赤坂 孝吉

表紙印刷：杉山留美子

第2回札幌現代音楽展 プログラムから、1982年8月13日(金)、札幌市教育文化会館小ホール

座光寺公明・作品展

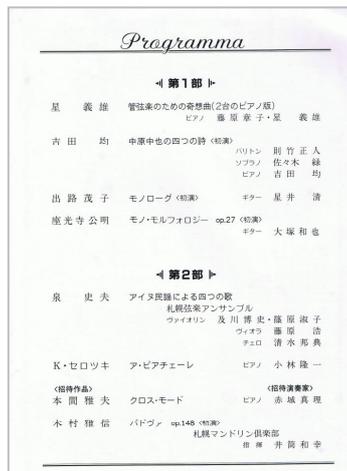
1983年9月9日(金) 自由午後7時
ルーテル市ヶ谷センター
※主催 東京新音楽コンソर्ट

プログラム

コンポジションI「蛇姫の夢より」op.8	ピアノ 大塚 和也 ヴァイオリン 田端 隆博 ピアノ 座光寺公明
コンポジションII「瞑」op.11	尺 八 菅原久仁義
コンポジションIII「秋」op.13 (1982)	尺 八 菅原久仁義 十七弦 梶 英夫
無伴奏チェロのための「変奏曲」op.16	ヴァイオリン 田端 隆博 チェロ 毛利 巨塵 ピアノ 毛利 巨塵
— 休憩 —	
無伴奏チェロのための「変奏曲」op.16	チェロ 毛利 巨塵
「死の淵より」詩・高見 順 op.19 (1982)	声 田端 隆博 ピアノ 橋口 雅博
ピアノ三重奏「トリス・アドヴァルム」op.23 (1982)	ヴァイオリン 田端 隆博 チェロ 毛利 巨塵 ピアノ 二橋忠志

座光寺公明・作品展(I)プログラムから、1983年9月9日(金)、ルーテル市ヶ谷センター

84年7月10日(火)。第5回札幌現代音楽展、札幌市教育文化会館小ホール。「モノ・モルフロジー」Op.27。Guitar.大塚和也。長短2度に基づく、音の組織化の試み。



第5回札幌現代音楽展 プログラムから、1984年7月10日(火)、札幌市教育文化会館小ホール

84年9月。私は上京した。

84年10月27日(土)。午後、渋谷ヤマハの楽譜売り場で座光寺さんと偶然ばったり会う。彼にとつては初対面。そのまま喫茶店に入り3時間話し込む。札幌現代音楽展のこと、木村先生のこと、自分の仕事のことなど。特に、現代音楽展については、今後のことを憂慮している様子。なぜか。会員が皆おとなしすぎる、という。例えば、7月の札幌現代音楽展に本間雅夫氏を招待したが、せっかくのよい機会であるにもかかわらず氏を捕まえて帰さないくらいの意気込みに欠ける、という。

私は、彼に不思議な因縁を感じて作曲のレッスンを受けることにする。

84年11月。初めてのレッスンの日。彼はゲタをはいて、京王線明大前の駅前で待つ私を迎えに来てくれた。彼の家は、陸橋を渡って突き当たったら左、次を右、次を左、次を右、次を左。「ジグザグに行けばいいんだ」と座光寺さん。複雑だけどシンプルだ。

84年11月21日(水)、「現代音楽の流れ」、神奈川県立音楽堂。彼の推薦コンサート。ウェーベルンの「4つの小品」、小倉朗のVnとPfのための「ソナチネ」などを聴く。Vn.小林健次。Pf.一柳慧。

85年2月、座光寺さん宅に、3時間。「好きな作品は？」との問いに次の諸作品をあげる。

- | | |
|--------------|--|
| A.Schonberg | 「ワルソーの生き残り」 |
| P.Hindemith | 「宇宙の調和」「画家マチス」 |
| B.Bartok | 「2台のピアノと打楽器のためのソナタ」
「弦楽器・チェレスタ・打のための音楽」
「オケコン」 |
| I.Stravinsky | 「詩編交響曲」 |
| M.de.Falla | 「コンチェルト」 |
| A.Webern | 「ピアノのためのバリエーション」 |

彼が次のような「対位法 九つの規則」を教えてくれたことがある。

1. 平行8度、5度は×。
2. 主拍(協)、副拍(不協)のとき、この不協和音程はタイできない。
3. タイによってできた不協和音程は必ず2度進行して解決する。
4. 導音は重ねない。
5. 8度に解決する掛留及び8度音程の使用は効果が悪い。
6. 旋律の増音進行は×。
7. 平行移動の音程は×。
8. 主拍に5度音程は×。
9. 終りの音は、主主、3主、主3の組はよいが、属主は×。以上。

実はこれ、彼が木村先生から最初に伝授されたものという。

座光寺さんのレッスンは1回につき五千円で、2・3時間だったろうか。レッスンというより、音楽の話が中心で、特に自分の作品のこと、作曲の7つ道具、西洋と日本の文化の違い、「トリスタンとイゾルデ」の分析、学校の音楽教育などについて、(ときには私が差し入れたビールを飲みながら)話して過ごすことのほうが多かった。途中で作曲仲間から電話が入ることも多く、我々が2階の彼の部屋にいると、階下から母親が「ひろあき、電話だよ」と大声で叫ぶのだが、私の名前も博昭なのである。

彼の家には、はじめピアノが見当たらなかった。途中で中古ピアノが現れたが弾いている気配はなかった。また、ラジカセ以外、オーディオらしきものもなかった。

座光寺さんの自筆スコアは、いつもきちんと整理されており、本棚に整然と並んでいたものだ。

85年6月9日。同月28日(金)に、仙台で自作「モノ・モルフォロジー」が演奏されるから、ぜひと勧められるが遠過ぎるので辞退。このとき、「音楽の現代と伝統の会」を知る。

プログラム	
石川 浩	4人のクラリネット奏者のためのディヴェルティメント ／仙台クラリネット・アンサンブル
金井 洋	“宝石群”より ※ Senohack / ピアノ：水田ゆり IV Fishhawk / フルート：桑村 純男
座光寺 公明	モノ・モルフォロジー ／ギター：菅藤 功一
----- 休 憩 -----	
嶋津 武仁	変調された自然音とオブジェ化したピアノのための作品 ／ピアノ：佐藤 明美 良 指：嶋津 武仁
遠藤 安彦	Image '85 / アルト・サクソ：渡辺 長夫 打楽器：星 律子
今井 邦男	女声合唱組曲“城へ行く道” 詞：北島 弥子 1. 野公よー、—— 森の奥から—— 2. 藤よまよ、—— その土国は—— 3. 城跡はて
	／合唱：六月の歌声 指揮：今井 邦男 ピアノ：渡谷るり子

●演奏場中のご入場、場内の写真撮影・録音は固くお断りいたします。
●演奏中にお手帳等の撮影や録音のフラッシュがならぬようご注意ください。
●小さなお子様の立ち場には、おくれこれに注意下さい。

OGD-17 現代作曲展 '85 プログラムから、1985年6月28日(金)、仙台市戦災復興記念館ホール

85年 7月 30日(火)。座光寺公明・作品展 II、ルーテル市ヶ谷センター。

「天宇受女」ソプラノ、ピアノ、3 打楽器、7 管弦楽器のための音楽(1980)、指揮.小林隆一。
五重奏曲(1983~85)、指揮.座光寺公明。
ピアノ曲・I(1985)、Pf.座光寺公明。
室内チェロ協奏曲(1985)、指揮.小林隆一、Vc.毛利巨塵



座光寺公明・作品展 II チラシとプログラムから、1985年 7月 30日(火)、ルーテル市ヶ谷センター

彼には、音楽の書籍やスコアを随分貸してもらったものだ。(例えば、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲、「トリスタンとイゾルデ」、「ワルソーの生き残り」、ウェーベルンの「バリエーション」などのスコア。柴田南雄の「グスタフマーラー」、小泉文夫の「民族音楽研究ノート」、シュトゥッケンシュミットの「現代音楽の創造者たち」、近藤譲の「耳の思考」など)

その頃、私はレッスン料がままならず、当初1か月に1回のペースのレッスンも途切れがちで、結局、85年 10月で休止する結果になった。

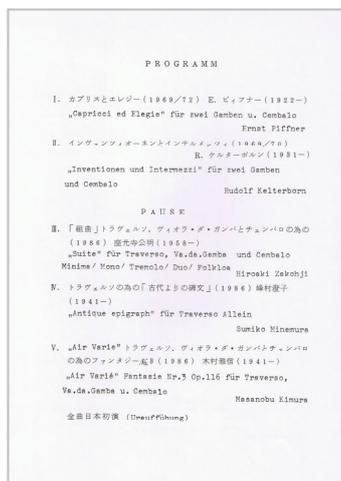
85年 10月 14日付の手紙。

木村先生の演奏会が東京であります。
是非友達を連れて、来て下さい。

85年 11月 18日付のハガキ。

先月 10月の木村先生の東京での作品コンサートは、大成功でした。(中略)
大変急ですが、来年 3月になんと、結婚することになりました。これから先どうなることか…
…。
来年 5月、スイスでのコンサートが決定！その内の一つは、私の作品だけによるコンサートです。H.Zakoji

86年 2月 26日(水)。20世紀の音楽・IV 一古楽器によるスイスと日本の作品展一、ルーテル市ヶ谷センター。トラヴェルソ、ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロのための「組曲」。



20世紀の音楽・IV プログラムから、1986年2月26日(水)、ルーテル市ヶ谷センター

86年 3月の結婚披露パーティーに招待されるが、返事を出したもののパーティーには出席できなかった。

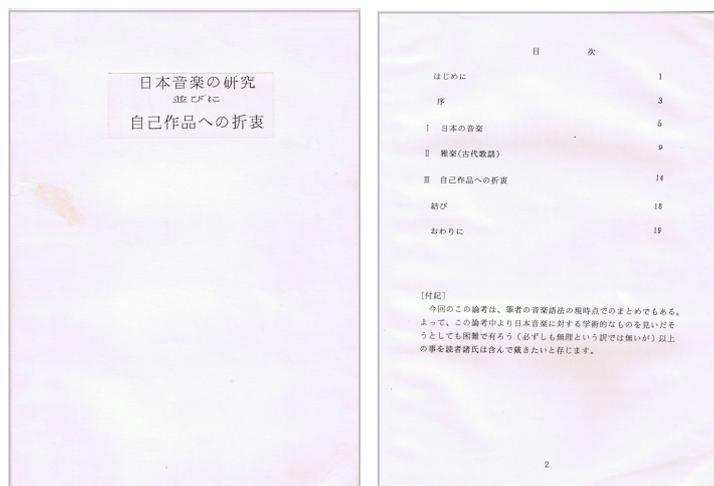
86年 6月 19日(木)。座光寺公明・作品展 III、ルーテル市ヶ谷センター。渡欧の報告会だったが、欠席。



座光寺公明・作品展 III チラシ、1986年6月19日(木)、ルーテル市ヶ谷センター

86年 9月、夫人の油絵個展に出かける。カンディンスキーだったか何だったか、抽象画をスコアに見立ててのピアノ演奏を聴かせてくれる。絵の方は、「青」を基調とする様々な石膏像を描いたものだったが、中でも一等よいと思われた10号の作品を1枚買う。彼はお礼に「日本音楽の研究並びに自己作品への折衷」という論文をくれる。

オーケストラ作品のテープを聴かせてくれるが、それは Hindemith の「宇宙の調和」の影響が感じられるものだった。



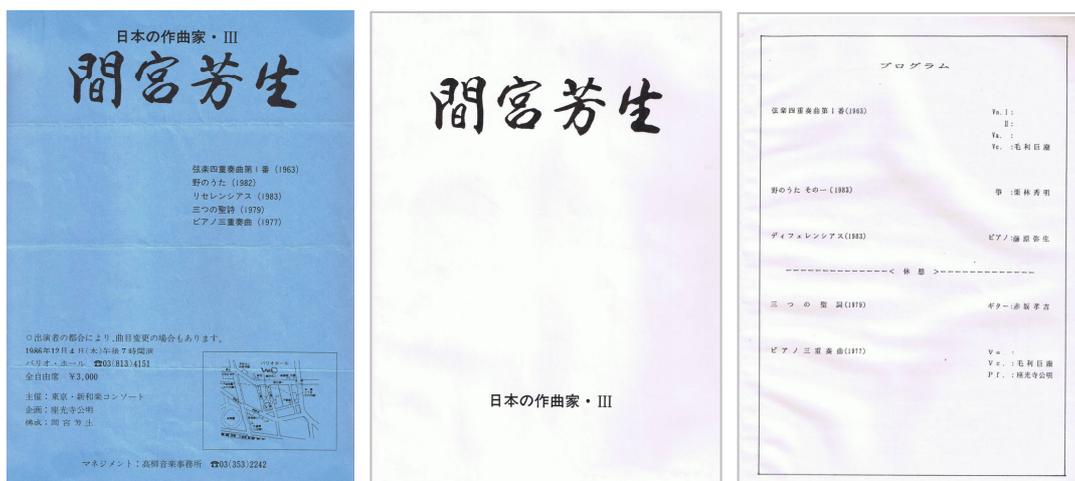
座光寺公明著、「日本音楽の研究並びに自己作品への折衷」から、1984年2月29日発行

86年11月16日付の「日本の作曲家・III 間宮芳生」のコンサートへの誘いの手紙。

妻の個展では、絵をお買い上げくださり、ありがとうございます。よかったら是非私のコンサートへ来て下さい。おもしろい会になると思います。

86年12月4日(木)、パリオホール。「日本の作曲家・III 間宮芳生」。企画、座光寺公明。

プログラムの変更があり、特にお目当ての弦楽四重奏曲は省略された。主催者としてはかなり苦しい演奏会のようです。それでも、ロビーでジャパン・タイムスの記者のインタビューを受ける彼と夫人の姿に、前途洋々としたものを感じたのだが……。



日本の作曲家・III 間宮芳生 チラシとプログラムから、1986年12月4日(木)、パリオ・ホール

87年の年賀状。竹の子と竹の水墨画に小さな字で、
あけまして、おめでとう。
そして、御結婚
おめでとう。
今年は、いい年でしょうか。
宜しく申し上げます。

これが彼の生前において、最後の私へのメッセージとなる。

87年1月19日、急に(虫の知らせか)、それまで長い間借りたままだった2・3の音楽資料を返さねばと思い、郵便小包で座光寺さん宅へ送り返す。
……そして、1月29日である。

3月末、彼の死を知らない私は、座光寺さんへ手紙を書いた。そして、4月11日付の夫人からの手紙で1月29日に座光寺さんが急性心不全で亡くなったことを知った。彼の訃報が届いたその日の夜、電話口で夫人は、座光寺さんの亡くなったときの状況、フィンランドのクフモ音楽祭に参加予定だったこと、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」のオペラ化を構想中だったことなどを静かに話された。

私は、音楽雑誌はときどき「音楽芸術」を買って読むくらいで、その他は図書館や店頭でななめ読みすることになっている。しかし、そのときばかりは何か呼びかけたい気持ちにかられ、「音楽の友」の読者欄に「ある作曲家の死」という作文を投稿することにした。(後述)

座光寺さんが高く評価していた作曲家のひとりに八村義夫氏がいる。八村氏のLP作品集を大事そうにみせてくれたこともある。彼が以前八村氏に会ったとき、氏はすでに身体がぼろぼろだった、という話をしてくれた。(そして、八村氏は間もなく他界した。)

吉松隆氏についても、その繊細な感性に一目置いていたようだ。私は、座光寺さんが作曲の影響を最も受けた作曲家のひとりとして、八村氏をあげるべきではなかろうかと思っている。特に、八村氏の「エリキサ」(1974)などはどうだろうか。

以下は、彼の遺作品がとり上げられた演奏会で、私が聴いたもの。

87年11月16日(月)、日仏会館、アルビレオー音楽展・IV 一座光寺公明を偲んで。「コンポジション・V — フルートとハープの為の“異質同像” — Op.26」、Fl.勝俣敬二、Harp.猿田真菜。

88年2月4日(木)、ABC会館ホール、日本の作曲家'88 出版作品演奏会 XV。「モノ・モルフロジー Op.27」、Guitar.芳志戸幹雄。

89年1月17日(火)、草月ホール、日本の音楽展(XI)。「無伴奏チェロの為の変奏曲 Op.16」、Vc.毛利巨塵。

最後に、「音楽の友」87年8月号への投稿から。

彼は行動する作曲家でした。東京新和楽コンサートおよび札幌現代音楽展の同人として、数十にのぼる作品をのこし、代表作には <コンポジション・I> があります。彼の音楽は西洋の形式と日本の響きを融合した斬新な作風で知られています。

3年前、渋谷で彼と偶然知り合ってから、私はときどき世田谷の彼の家に通いました。二人で缶ビールを飲みながらウェーベルンのPfのためのヴァリエーションのテープを聴いたことや、変なおばさんと思っていた人が実はポリーン・オリベロスという音楽家だったという体験談、スキーで手の親指をけがしたにもかかわらず演奏会でピアノを弾いたことなど彼の思い出は尽きません。

彼は聴衆の啓蒙を唱え精力的な活動を行っていましたが、その聴衆はごく限られた人たちでした。彼が音楽の存在意義をミニコミ的な、人と人との関わりの中に求めていたとはいえ、私は彼の音楽を一部の専門家だけでなく、少しでも多くの人々に知っていただきたいと思います。



音楽の友、1987年8月号、p223から

以上

(1993年記、2007年画像貼付)

補足 このドキュメントは、木村雅信氏が詩誌「舟」71号に投稿された、座光寺さんに関する「流星の軌跡」というエッセイに刺激を受け、93年に書いたものです。